富山県 朝日町

柳田遺跡発掘調査報告書

２００３年

朝日町教育委員会

序

海と山に囲まれた自然色豊かな朝日町。古くより人々が生活するための環境にも恵まれていたためか、「朝日町はどこを掘っても遺跡がある」という話がよく聞かれます。その言葉通り、当町では海山問わず、いたる所にあらゆる時代の遺跡が確認されています。

今回調査を行なった『柳田遺跡』は、町内を流れる「小川」と「黒部川」の新旧扇状地の接点に位置し、地元でも昔から縄文時代の遺跡が存在すると伝えられる場所の一角です。

周辺には国指定史跡『不動堂遺跡』をはじめ、扇状地沿いに多くの遺跡が存在しており、一帯が縄文時代に繁栄をみせていたことがつぶさにわかります。

朝日町内で発見される遺構の特徴の一つに『工房跡』があげられます。宮崎・境海岸線沿いで拾うことのできる「翡翠」や「蛇紋岩」等を使用した石器類を製作する場として、縄文時代では『境A遺跡（遺物の一部が国指定重要文化財に指定）』・『明石遺跡』、古墳時代では『浜山玉つくり遺跡』が有名です。

『柳田遺跡』は、昭和47年度のほ場整備により、大半は消失したと考えられていました。しかし、今回の調査区は遺跡自体の保存状態が良く、「工房跡」の確認には至りませんでしたが、縄文土器をはじめ多くの未成品石斧や玦状耳飾が発見されました。さらに興味深いことに、長野県産の黒曜石や、東北産の頁岩で製作された石鏃も確認されています。

これらの発見からみて、「工房」のルーツや当時の交流・交易の経路を辿る上でも、『柳田遺跡』は今後重要な役割を担う遺跡であるということは間違いないといえるでしょう。

おわりに、この調査並びに報告書作成にあたり、ご協力を頂きました地元住民の方々及び富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年２月

朝日町教育委員会
教育長　木村正嗣

例　言

1　本書は富山県下新川郡朝日町柳田地内に存在する柳田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業に先立ち、朝日町教育委員会が実施した。
調査費用は富山県入善土木事務所が負担した。

3　調査事務局は朝日町教育委員会事務局生涯学習係におき、生涯学習係長水島康彦が調査事務を総括した。また、調査・遺物整理に当たり、朝日町シルバー人材センター及び、地元住民の方々の協力を得た。

4　調査期間　　平成14年５月２日～６月28日
調査面積　　433㎡

5　試掘調査・発掘調査担当者は、次の通りである。
試掘調査　　平成11年12月９日
本調査　　平成14年５月２日～６月28日
担当者　　（財）朝日町文化・体育振興公社　文化財保護主事　　匂坂　友秋
文化財保護主事　　越間　瑞穂

6　資料の整理、本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員、魚津市教育委員会麻柄一志氏の指導・助言を得て、文化財保護主事匂坂友秋・越間瑞穂が行なった。また、遺物・資料整理及び本書の作成において、次の方々からご指導助言をいただいた。記して誠意を表したい。

魚津市教育委員会	麻柄一志
富山県埋蔵文化財センター	斉藤　隆　高橋真実　越前慶祐
金沢市埋蔵文化財センター	南　久和
富山県教育委員会文化財課	高梨清志

7　本誌の挿図・写真図版の表示は次の通りである。
（１）　方位は真北、水平基準は海抜高である。
（２）　遺構の表記は次の記号を用いた。溝：ＳＤ　穴：ＳＫ
（３）　挿図の縮尺は等倍・１／２・１／３・１／４、第６・７図のみ70%縮小とした。
（４）　写真図版の遺物の縮尺は等倍・１／2に統一した。

8　土色の色名については、1997年後期版「新版　標準土色帖」に準拠した。

9　調査区は作業の進行上、区内を流れる用水を中心としてⅠ区・Ⅱ区に分けて調査を行なった。

10　出土品及び、記録資料等は、朝日町教育委員会が保管している。

本文　目次

序文
例言・目次
Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯……3
Ⅲ　調査の概要……4
　1 調査の方法
　2 地形・立地
　3 基本層序
　4 遺構……5
　5 遺物……6
Ⅳ　試掘調査……9
Ⅴ　まとめ……10
報告書抄録……43

挿図・図版・表　目次

挿図・図版

第1図　遺跡の位置と周辺の地形……1
第2図　遺跡の位置と周辺の地形……2
第3図　調査区周辺の地形……3
第4図　調査区拡大図……3
第5図　柳田遺跡過去調査区位置図……9
第6図　遺物分布図……11
第7図　調査区全体図……12
第8図　調査区遺構　平面・土層図1…13
第9図　調査区遺構　平面・土層図2…14
第10図～第19図　遺物実測図……15～24

表

表1－1　主な周辺遺跡一覧表（泊地区）……1
表1－2　主な周辺遺跡一覧表（宮崎・境地区）……2
表2　周辺の主な遺跡年代……2
表3　柳田遺跡基本層序……4
表4　過去の柳田遺跡発掘調査一覧……9

写真　目次

調査区全景……25
各調査区・作業風景……26
各調査区遺構写真……27
遺物出土状況……28
遺物写真（土器類）……29～35
遺物写真（石器類）……36～40
その他遺物……41
中世遺物……42

I　位置と環境

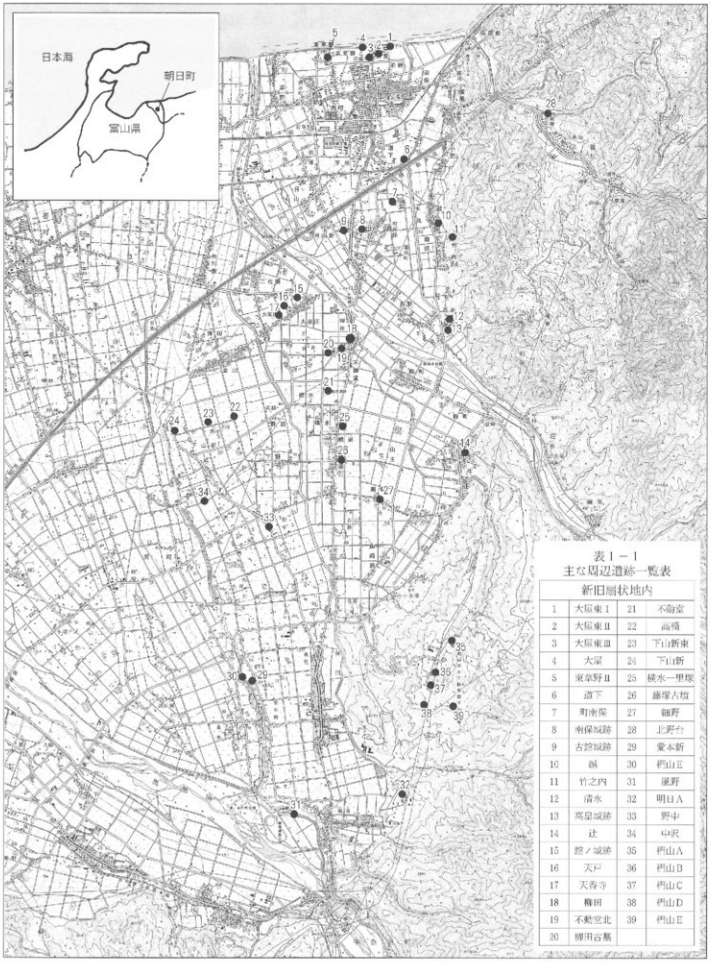


表1－1
主な周辺遺跡一覧表

新旧扇状地内			
1	大屋東Ⅰ	21	不動堂
2	大屋東Ⅱ	22	高橋
3	大屋東Ⅲ	23	下山新東
4	大屋	24	下山新
5	東草野Ⅱ	25	横水一里塚
6	道下	26	藤塚古墳
7	町南保	27	細野
8	南保城跡	28	北野台
9	古館城跡	29	愛本新
10	縣	30	栖山E
11	竹之内	31	屋野
12	清水	32	明日A
13	高屋城跡	33	野中
14	辻	34	中沢
15	館ノ城跡	35	栖山A
16	天戸	36	栖山B
17	天香寺	37	栖山C
18	梅田	38	栖山D
19	不動堂北	39	栖山E
20	柳田古墓		

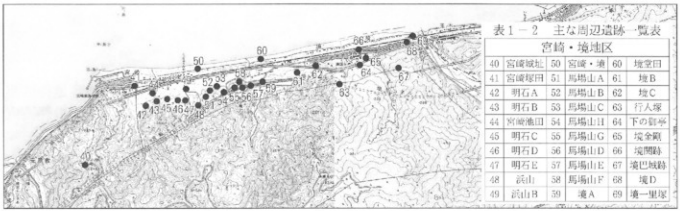


表１－２　主な周辺遺跡一覧表

宮崎・境地区					
40	宮崎城址	50	宮崎・浦	60	境堂田
41	宮崎塚田	51	馬場山A	61	境B
42	明石A	52	馬場山B	62	境C
43	明石B	53	馬場山C	63	行人塚
44	宮崎池田	54	馬場山H	64	下の割平
45	明石C	55	馬場山G	65	境金剛
46	明石D	56	馬場山D	66	境開跡
47	明石E	57	馬場山E	67	境巴城跡
48	浜山	58	馬場山F	68	境D
49	浜山B	59	境A	69	境一里塚

第１・２図　遺跡の位置と周辺の地形（S＝1/50,000）

位置と周辺の遺跡

富山県朝日町は新潟県との県境に位置する。今回の調査地「柳田遺跡」は朝日町大家庄の柳田地区に所在する。町内は小川（２級河川）を挟み北東側が小川の扇状地、南西側が北アルプス連邦から流れ出る黒部川（１級河川）の旧扇状地によって形成されている。

調査地は標高約48mで、小川と黒部川による新旧扇状地のちょうど接点の部分にあたり、さらに小河川が扇状地内を流れるため、わずかな起伏が見られ、当遺跡も小川支流の山合川左岸の微高地に位置している。

周辺の代表的な遺跡には、国史跡「不動堂遺跡」をはじめ、「不動堂北遺跡」「下山新遺跡」（以上朝日町）、同じ旧扇状地上には「坪野遺跡」（入善町）、「愛本新遺跡」「風野遺跡」（以上宇奈月町）などの時代を同じくした縄文遺跡が並ぶ。このことからも、縄文時代前期～晩期にかけて、この黒部川旧扇状地帯は、数多くの縄文文化が栄えた土地であったと推測できる。

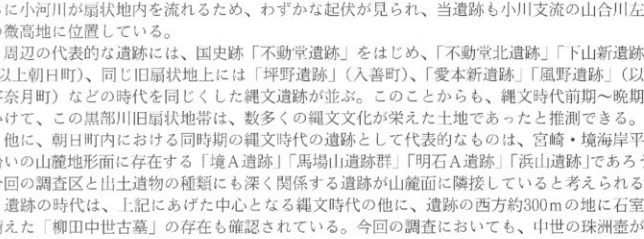
他に、朝日町内における同時期の縄文時代の遺跡として代表的なものは、宮崎・境海岸平野沿いの山麓地形面に存在する「境Ａ遺跡」「馬場山遺跡群」「明石Ａ遺跡」「浜山遺跡」であろう。今回の調査区と出土遺物の種類にも深く関係する遺跡が山麓面に隣接していると考えられる。

遺跡の時代は、上記にあげた中心となる縄文時代の他に、遺跡の西方約300ｍの地に石室を備えた「柳田中世古墓」の存在も確認されている。今回の調査においても、中世の珠洲壺が発見されており、縄文時代だけではなく、中世においても人々の営みがあったことが鮮明に映し出されたことになろう。

同じく中世の遺跡としては宮崎・境海岸平野沿いに「境関跡」「境堂田遺跡」「宮崎塚田遺跡」（ともに製塩遺跡）、県内最古の山城「宮崎城址」などが中世の繁栄を色濃く表している。

玉造りの里としても知られる海辺の工房と台地の工房。これらはどこからきてどのように文化を広め、交流を深めて生活をしていたのだろうか。「柳田遺跡」はその足跡を辿ることのできる貴重な遺跡であることは間違いないであろう。

表２　周辺の主な遺跡年代



Ⅱ　調査に至る経緯

平成11年度に、富山県入善土木事務所において、主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業が実施されることとなった。この拡幅予定地が埋蔵文化財包蔵地である柳田遺跡の範囲内にあたるため、富山県教育委員会文化財課と朝日町教育委員会の協議の結果、平成11年12月に事前調査として試掘調査を行なった。

試掘調査の結果（第Ⅳ章参照）、遺構・遺物の出土状況などから、調査区西側に遺跡の範囲が拡がっていることが確認された。

そのため、平成14年５月より、試掘調査区西側の道路拡幅予定地に当たる部分約433㎡の本調査を行なうこととなった。

第３図　調査区周辺の地形

第４図　調査区拡大図

Ⅲ　調査の概要

1．調査の方法

発掘調査は、調査区内の建設物の撤去後、遺物がかなり表土に出土していることが予想されたため、最初に踏査による遺物採集・確認を行なった。

その後バックホウによる表土除去を行ない、10mごとの基本杭を設置し、その杭に基づき2m×2mのグリットを設け、それを基準とした。基本杭は国家座標に基づいて起点を設定し、座標軸は南北をX軸・東西をY軸に設定した。

調査は、表土除去後は人力による掘削作業を行ない、遺構・遺物・上層等の確認をし、後日整理作業を行なった。

さらに、ベルトコンベアにより排出した土中においても、作業期間中に遺物の取り残しがないか再度点検作業を行なった。

2．地形・立地

この調査区は、朝日町大家庄の柳田地区に存在し、2級河川小川の支流にあたる山合川左岸標高約48mの微高地にあたる。周辺の縄文遺跡「不動堂遺跡」や前回までの調査などで確認された出土遺物の種類、また「柳田遺跡」の西方約300mに位置する「柳田中世古墓」の存在などからも、「柳田遺跡」は縄文から中世にかけて広く栄えた遺跡として位置づけられている。

ただこの地区は昭和47年から始まったほ場整備などにより、遺跡の大部分が削平・消滅したと考えられていた。

しかし、今回の調査区は住宅・畑地等として使用されていたため、遺構は、縄文時代の層に中世の層が重なる形で、住宅跡の一部を除き、比較的良好な状態で現存していた。

3．基本層序

調査区内の用水を挟んで、東西により弱冠土質の違いは見られたが基本的には、表土（耕作土・盛土）を除き、3層確認できた。かなり上部の層（表採・第1層）からも遺物が多量に確認されたが、遺構の検出にまでは至らない。これは田畑地などの利用によるものと考えられるだろう。中世も縄文時代の遺物もともに、2層・3層から主に確認されている。このことより遺物包含層は第2層から第3層であろうと考えられる。遺物の出土状況などから判断すると、2層が縄文時代の主な生活面ではないかと推測できる。（写真図版参照）

海抜は47.61mから49.64mを測り、1層から3層までの深さは約40cmから約200cmである。建設物等により、一部撹乱が見られる。

なお、調査区内を流れる用水を中心として、調査区を作業の進行上、Ⅰ区・Ⅱ区に区別したが、基本的に時代・遺跡の種類等の大きな差はない。同一期の遺跡といえるだろう。

内訳は以下の通りである。

表3　柳田遺跡基本層序

土　層	色　相	土色・土質	備　考
表　土	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	
1　層	10YR4/1	褐灰色粘質土	
2　層	10YR3/3	暗褐色粘質土	遺物包含層
3　層	10YR2/1	黒褐色粘質土	
地　山	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	

4．遺構

（1）Ⅰ区

a　縄文時代の遺構

ＳＤ02　Ｘ３～６、Ｙ６～８に位置し、東西に流れる溝である。幅約２ｍ、深さは最深部で約１ｍを測る。ＳＤ01に切られているが、さらに調査区西側に延びると考えられる。覆土は、遺物包含層の黒褐色粘質土である。前期末葉の土器、玦状耳飾１点が出土した。

ＳＫ11　Ｘ６～８、Ｙ８～10に位置し、長軸約２ｍ、短軸約1.4ｍの楕円形を呈し、深さ約0.2ｍを測る。前期末葉の土器、石皿１点が出土した。

ＳＫ12　Ｘ５～７、Ｙ８～10に位置し、直径約２ｍ、深さ約１ｍを測る円形の土坑である。覆土は遺物包含層である黒褐色粘質土で、前期末葉の土器が遺物整理箱（37㎝×60㎝）で３箱分出土した。この土坑から多くの土器と磨製石斧未成品３点、砥石１点が出土したため、遺物の廃棄坑として使われていたと考えられる。

ＳＫ13　Ｘ６～８、Ｙ９～11に位置し、長軸約２ｍ、短軸約１ｍ、深さ約0.2ｍの楕円形を呈する。前期末葉の土器が出土した。

ＳＫ37　Ｘ４～６、Ｙ４～６に位置し、長軸約2.8ｍ、短軸約2.3ｍ、深さ約0.1ｍの隅丸長方形を呈する。前期末葉の土器、磨製石斧未成品１点が出土した。

ＳＫ91　調査区南東に位置する土坑である。長軸約0.8ｍ、短軸約0.4ｍ、深さ約0.4ｍの楕円形を呈する。前期末葉の土器が出土した。

ＳＫ121　Ｘ8、Ｙ８に位置し、直径約0.2ｍ、深さ約0.2ｍを測る円形の土坑である。この土坑を半裁した西側から磨製石斧未成品が３点出土した。

なお、Ｘ８～Ｘ10の間は家屋の池跡の部分にあたり、遺構の遺存状態は、良好ではなかった。

b　中世の遺構

ＳＤ01　調査区東端を南北に流れる溝である。幅約３ｍ、深さ約0.5ｍを測り、覆土は遺物包含層の黒褐色粘質土である。出土遺物には、中世の珠洲焼・土師質土器・縄文時代前期末葉の土器・石器があるが、縄文時代の遺物は、溝を掘削した後に混入したものと考えられる。この溝の年代は、出土した遺物から判断し、鎌倉時代から室町時代にかけてのものと考えられる。

ＳＫ57　先述したＳＤ01底面で検出した円形の土坑で、直径約0.3ｍを測る。ＳＤ01の掘削後に作られたと考えられる。この遺構から底部を上向きにした状態で珠洲焼第Ⅱ期の双耳壺が出土した。遺構の直径と壺の大きさがほぼ同一であるため、意図的に埋蔵したものであると考えられる。

ＳＫ20・ＳＫ68　調査区南端のＳＤ01底面で検出し、SK20は直径約1.5ｍ、深さ約0.3ｍ、ＳＫ68は直径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍを測る。遺構検出面の20cmほど上面で、石組遺構を確認した。この中には、磨製石斧未成品を転用したものが２点含まれる。石組遺構とＳＫ20・ＳＫ68との関わりが予想される。

その他の土坑　10基の土坑をＳＤ01底面で検出した。ほとんどの土坑は、直径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍを測る。遺物は出土していない。

（2）Ⅱ区

Ⅱ区では、中世の遺構は検出されず、縄文時代の遺構のみ検出した。

ＳＫ01　調査区南西端で検出した。一部調査区外に延びるため、正確な規模は不明であるが、直径約１ｍの円形を呈すると考えられる。前期末葉の土器・磨製石斧未成品が２点出土した。

Ｘ７からＸ13の間において自然地形と考えられる擂鉢状の深さ約0.5ｍの窪みを確認した。この間では、多数の土器が出土したため、Ⅰ区のＳＫ12同様、Ⅱ区のＳＫ34・ＳＫ35などこの一帯は、遺物の廃棄場所であったと考えられる。

5．遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代前期末葉の土器・石器類を中心に珠洲焼・土師質土器などの中世の遺物と合わせ、遺物整理箱で62箱分である。中世の遺物は、出土量が少なく整理箱１箱分である。今回の調査で主体をなす縄文時代前期末葉の遺物は、土器が整理箱46箱、打製石斧・磨製石斧・石皿・砥石・玦状耳飾・石鏃などの石製品は整理箱で15箱分である。

なお、調査は調査区中央に用水が流れていたため、Ⅰ区とⅡ区に分けて行なったが、出土遺物・遺構から判断し、時代・遺構の性格に差異はほとんど認められない。そのため、Ⅰ区とⅡ区の遺物を一括して記述する。

（1）土器

a　縄文土器

遺物整理箱で46箱分出土した。昭和49年に実施した前回の調査では、前期末葉から晩期までの遺物が確認されたが、今回の調査で出土した土器は、前期末葉の土器のみである。先述したＳＫ12（Ⅰ区）から整理箱３箱分、ＳＫ34・ＳＫ35（Ⅱ区）から整理箱で３箱分出土した。それ以外は、ほとんどが遺物包含層から出土した。

出土した土器を文様や形態により、大きく５つに分類した。

第１類　（第10図　１～13）

口縁部に口縁に平行なつまみ出しによる微隆起線文を施す。胴部の文様には羽状縄文を施すもの（１～12）と沈線で直・曲線を施すもの（13）がある。形態は、胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。今回の調査で出土した土器のうち、最も古い一群と考えられる。

第２類　（第10図　14～32）

外反する口縁部から胴部にかけて無文地上に結節状浮線文（14～29）や結節状沈線文（30～32）を施す。口縁の形態には、平縁の口縁と波状口縁（18・19・25）がある。

第３類　（第11図　33～61）

口縁部に鋸歯状文を施し、胴部には縄文地上に結節状浮線文（33～51）を施す。結節状浮線文の他に半隆起線による渦巻文を施すものがある（54～61）。口縁端部には、小突起を付ける土器（33～37）や、細い粘土紐を付着させた土器（38～41）が見られる。52・53は口縁部に半隆起線文を施し、端部に粘土紐を付着させる。

第４類　（第11・12図　62～73）

口縁部に鋸歯状文は施されず、縄文地上に結節状浮線文を施す。口縁形態には、頸部で屈曲し、外反気味に延びるもの（62・63）、端部が直立するもの（64）、さざ波状口縁を持つもの（65・66）、平縁状口縁のもの（67～69）、上半が内湾するもの（71）、波状口縁のもの（72・73）がある。

第５類　（第12図　74～85）

縄文地に結節状浮線文を施し、細い粘土紐を貼り付ける。口縁部の形態には、上端が直立するもの（74・75）、さざ波状口縁のもの（76）、波状口縁のもの（84）などが見受けられる。

その他の土器　（第12図　86～91）

86は高台付土器である。内外面に磨き調整が施され、体部には赤彩が一部残る。日常的に使用されたものではなく、特別な時に使用されたものと考えられる。87・88は浅鉢である。87は口縁が直線的に延び、口縁端部は内屈する。端部には、粘土紐の貼り付けによる文様が施される。88は口縁が内湾気味に延びる。文様は施されない。

b　中世の土器　（第12図　92～98）

遺物整理箱で１箱分出土した。土師質土器（92～94）、珠洲焼（95～98）が中心となる。主にＳＤ01（Ⅰ区）とその覆土から出土した。その他の遺構から出土した遺物には、ＳＤ01底部で検出されたＳＫ57（Ⅰ区）の珠洲焼の双耳壺（98）がある。珠洲焼第Ⅱ期のもので、口径8.8

cm・高さ22.5cm・底部8cm・胴部の最大径は16.7cmを測る。口縁端部の一部を欠損しているが、ほぼ完形の状態で出土した。他の珠洲焼には、甕・擂鉢があり、第Ⅳ期～第Ⅴ期のものである。

（2）石器

今回の調査では132点の石器類が出土した。石鏃15点・打製石斧3点・磨製石斧76点・凹石3点・砥石18点・石皿1点・叩石2点・玦状耳飾12点・垂玉1点・石匙1点がその内訳で、主に遺物包含層である黒褐色粘質土層から出土した。その他にヒスイの原石4点・水晶の剥片2点・玉髄の剥片8点・鉄石英の剥片8点・多くの蛇紋岩の剥片・蛇紋岩の原石を加工したもの・黒曜石の剥片がある。

a　石鏃　（第13図　1～15）

15点出土したが、その内訳は完形品5点（1～5）、欠損品6点（6～11）、未成品4点（12～15）である。遺構内から出土したものは、SK02（Ⅰ区）出土の石鏃1点（9）のみである。完形品は全て凹基無茎鏃で、石材は黒曜石2点（1～2）、ハリ質安山岩1点（3）、頁岩1点（4）、鉄石英1点（5）である。欠損している石鏃の石材は、6～9は黒曜石製で6～8は凹基無茎鏃、9は凸基有茎鏃である。10はメノウ製の平基有茎鏃である。11は鉄石英である。未成品4点の石材は、黒曜石2点（12・13）・メノウ2点（14・15）である。15は被熱痕が見受けられる。

b　石匙　（第13図　16）

1点出土した。遺物包含層から出土したもので、石材は鉄石英である。柄の主軸と刃部が直交する横形石匙である。刃部は、両側面から調整が施される。刃部には光沢があり、使用された痕跡を見ることができる。

c　玦状耳飾　（第14・15図　17～28）

12点出土した。完形品はなく、全て欠損品である。遺構から出土したものは、Ⅰ区SD01（22）・Ⅰ区SD02（23）・Ⅰ区SK02（24）の計3点である。形態は、樋口清之氏分類のA類（短形、24～28）とB類（楕円形、17～23）が見受けられる。石質は、A類では蛇紋岩3点（24・27・28）・滑石1点（26）・不明1点（25）、B類では蛇紋岩3点（17～19）・滑石4点（20～23）である。20は先端の欠損部分が磨かれており、垂玉としての利用を試みたものと考えられる。

d　垂玉　（第15図　29）

1点出土した。滑石製で長さ2cm・幅0.5cm・上部中央には約2mmの穿穴が施される。

e　玉未成品　（第15図　30）

石質は不明であるが、灰黄褐色の石の片面を研磨した玉の未成品である。

f　ヒスイ原石　（第15図　31・32）

ヒスイ原石は4点出土したが、その内2点を図示した。31は端部の一部を打ち欠き、32は片側側面と下部を打ち欠く。今回の調査では、ヒスイの玉類は発見されていない。

g　蛇紋岩加工品　（第15図　33・34）

33は蛇紋岩を3方向から研磨し、加工を施す。34は扁平な蛇紋岩の表裏に擦切り痕を残す。

h　打製石斧　（第16図　35～37）

完形品2点（35・36）・未成品1点（37）が出土した。石材は砂岩を使用している。Ⅰ区の遺物包含層から出土した。完形品2点は撥型を呈し、36は長さ28cm・幅8.3cm、37は長さ15.5cm・幅6.5cmである。未成品は上部と下部が欠損する。

i　凹石　（第16図　38～40）

3点出土した。石材は砂岩である。長さ約7cmの大きさのもの（38）と長さ5cmの大きさのもの（39・40）がある。

j　叩石　（第16図　41・42）

2点出土した。石材は蛇紋岩（41）と砂岩（42）である。

k　磨製石斧　（第17～19図　43～67）

76点出土した。原石を剥離したもの7点・未成品23点・製作段階で破損したもの29点・完形品3点・完形品で欠損したもの14点がその内訳である。石材は蛇紋岩を使用している。磨製石斧の大きさは、未成品・完形品・完形品で欠損したもの40点のうち、大形（長さ10㎝以上のもの）20点・中形（長さ8㎝前後）11点・小形（6㎝未満）9点である。その中で欠損品及び未成品を叩石として利用したものが3点あるが、その内2点を図示した（43・44）。45は特殊な石斧と考えられる。軟玉製で頭部は欠損するが、刃部の形成は行われない。石斧としての使用よりも、祭祀等特別の目的で使用されていたと考えられる。46・47は小形の完形品、48は中形の完形品である。57～67は遺構から出土した磨製石斧である。57～59はＳＫ12（Ⅰ区）から出土した未成品で、原石を剥離したもの（57）・剥離、敲打したもの（58）・剥離、敲打、研磨したもの（59）がある。60・61は、中世の遺構であるＳＤ01内（Ⅰ区）の石組遺構で利用された未成品である。62はＳＫ37（Ⅰ区）から出土した未成品である。63～65はＳＫ121（Ⅰ区）から出土した未成品である。原石を剥離したもの（63）と剥離、敲打、研磨したもの（64・65）がある。66・67はＳＫ01（Ⅱ区）から出土した未成品である。原石を剥離、敲打したもの（67）と剥離、敲打、研磨したもの（66）がある。

l　砥石　（第19図　68・70）

砥面が、平坦かなだらかに窪むものを砥石とした。18点出土したが、その内2点を図示した。石材は、花崗岩1点・砂岩17点である。大きさは大形（長さ20㎝以上）7点・小形（長さ10㎝前後）11点である。遺存状態では、大形の砥石2点が完形品で、その他は欠損品である。遺構から出土した遺物は、68（Ⅰ区　ＳＫ12）のみである。小形砥石の欠損品のうち1点（68）は、凹石として利用している。68・70ともに砂岩である。

m　石皿　（第19図　69）

中央が全体的に窪むものを石皿とした。1点のみである。砂岩製でＳＫ11（Ⅰ区）から出土した。

n　その他の剥片

図示はしていないが、水晶の剥片2点・鉄石英8点・玉髄8点・黒曜石218点を確認した。その内二次加工のある剥片は、水晶1点・玉髄4点・黒曜石101点である。

Ⅳ　柳田遺跡試掘調査

柳田遺跡は古くより、縄文時代から中世の遺跡として広く知られている。

平成11年12月、主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業に伴い、範囲に係る柳田遺跡の有無、依存状況を確認するため、試掘調査を実施した。

今回の調査区は、主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業部分、東側隣接地に当たる。調査の方法は、調査対象面積約400㎡中、道路を挟んで東西に１本ずつトレンチを設定し、重機及び人力により、地表面から約50㎝～70㎝に堆積する地山まで掘り下げ、遺構・遺物等の依存状況を確認した。

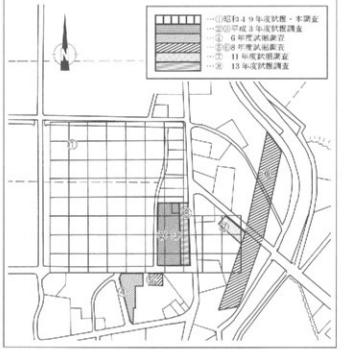
調査の結果、１Ｔ内にて遺構と縄文土器３点が出土。２Ｔ内からは遺構は確認されなかったが、縄文土器が100点以上と石器の剥片が１点出土した。

以上のことから、遺跡の範囲は調査区西側に延びている事が予測できたため、本調査の範囲は、試掘調査範囲の道路を挟んだ西側の道路拡幅予定部分とすることに決定した。

表４　過去の柳田遺跡発掘調査一覧

番号	年代	調査法	遺跡の年代	遺跡の種別	主な出土遺物
—	1948	本調査	中世	古墓	石室　人骨
①	1974	試掘調査 本調査	縄文前期 ～中世	縄文－住居跡 中世－土坑・溝	縄文　縄文土器（前・中・後・晩期） 石器（打、磨製石斧・擦石・石錘・玦状耳飾・垂玉他） 中世　珠洲・土師質土器・鉄釘・土製品（メンコ・滑車形耳飾・土偶）
② ③	1991 7・8月	試掘調査 （第１・２期）	縄文・中世・近世	集落跡	縄文土器・石器・陶磁器・土製品他
④	1994	試掘調査	縄文	集落跡	縄文土器・珠洲
⑤⑥	1996	試掘調査	縄文・中世・近世	集落跡	縄文土器
⑦	1999	試掘調査	縄文・中世・近世	集落跡	縄文土器・石器・陶磁器
⑧	2001	試掘調査	縄文・中世	集落跡	縄文土器・石器剥片・珠洲・土師質土器・翡翠原石・玉製品

第５図　柳田遺跡過去調査区位置図



2001年度(⑧)試掘調査出土遺物

V　まとめ

前章で述べた調査結果を要約し、今回の調査のまとめとする。

1　柳田遺跡は、縄文時代と中世の遺跡として知られている。昭和49年の発掘調査では、縄文時代前期から晩期の土器・中世の珠洲焼等の遺物が出土した。

2　今回の調査で主体となる縄文時代前期末葉の遺構では、遺物の廃棄坑と考えられるSK12（Ⅰ区）、SK34・35（Ⅱ区）の他、溝や土坑を検出したが、住居跡等は検出できなかった。

中世の遺構は、SD01（Ⅰ区）と、その底面で検出された土坑のみである。なお、平成14年度の試掘調査の結果から、中世の遺構は西側に拡がっているものと考えられる。

3　出土した縄文土器は、遺物整理箱で46箱分である。全て縄文時代前期末葉の土器である。遺物量が多いため、今回の調査区周辺に人々が居住していたと考えられる。

4　石製品では多くの磨製石斧の未成品が出土した。柳田遺跡においても磨製石斧を製作していたと考えられる。

石鏃では信州産と考えられる黒曜石、岐阜県で採取されるハリ質安山岩、東北地方で採取される頁岩を確認した。他の地域との交流を行なっていたことが推測できる。

ヒスイの原石は4点出土した。打ち欠いた痕跡を見ることはできるが、加工品や工房跡と考えられる遺構は発見されなかった。現時点で『縄文時代前期末葉にヒスイの玉類を製作していたか』ということについて明確な答えを出すことはできない。

玦状耳飾は12点出土した。樋口清之氏分類のA類とB類にあたる。

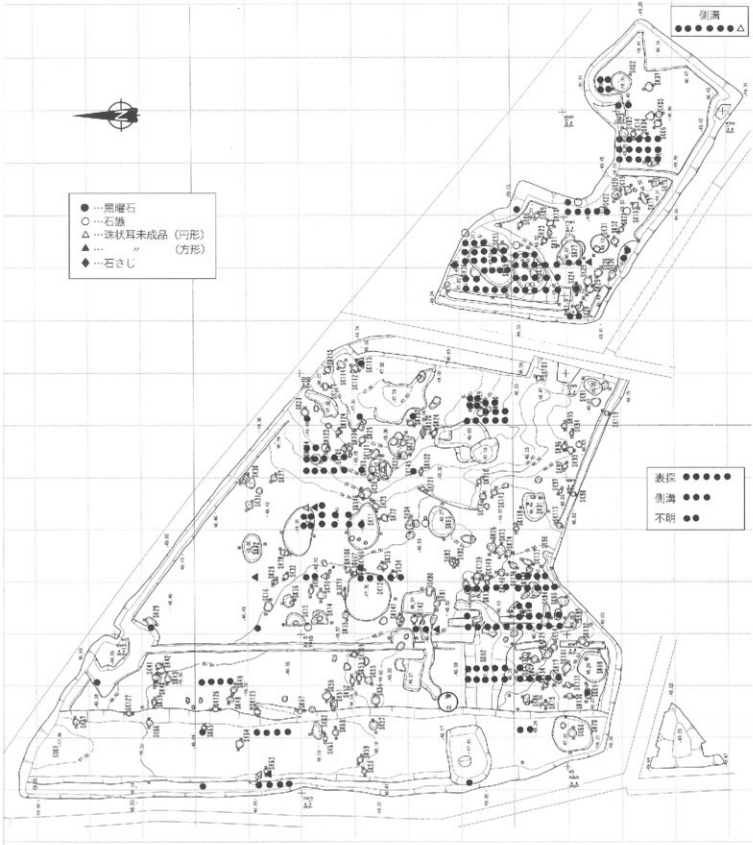
縄文時代の遺構・遺物包含層から前期末葉以外の土器が出土していないこと、他の遺跡で出土した玦状耳飾の形態等により、縄文時代前期末葉に柳田遺跡で製作されたと考えられる。

5　朝日町で縄文時代に玦状耳飾を製作した遺跡は、この他に前期初頭の明石A遺跡が挙げられる。玉作りの遺跡では、縄文時代中期にヒスイの玉類を製作した境A遺跡・馬場山遺跡群、滑石製の勾玉や管玉などを製作した古墳時代の浜山玉つくり遺跡などがある。（2P　第2図参照）

このように朝日町では、縄文時代から古墳時代にかけて玉作りを行なう集団が居住していたであろうことが色濃く分かる。

参考文献

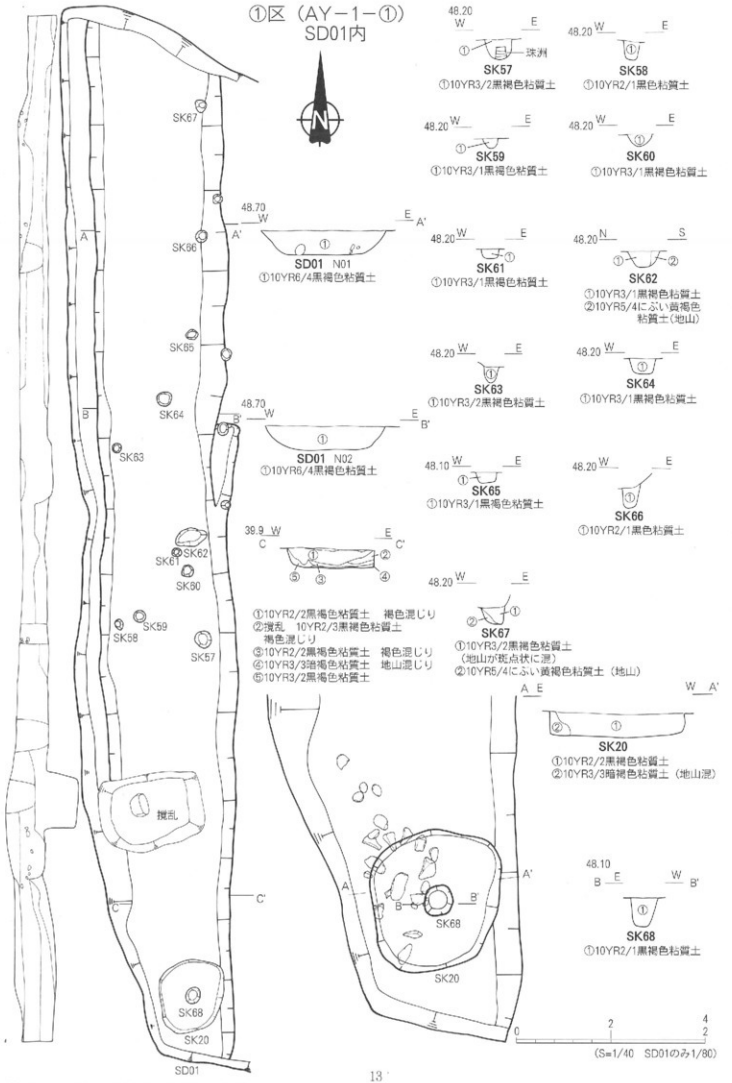
朝日町教育委員会　2000　『馬場山H遺跡発掘調査報告書』
大門町教育委員会　1982　『小泉遺跡』
富山県教育委員会　1970　『立山町吉峰遺跡発掘調査報告書』
富山県教育委員会　1974　『富山県立山町吉峰遺跡第3次発掘調査概報』
富山県教育委員会　1975　『富山県朝日町　柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』
富山県教育委員会　1990　『北陸自動車道遺跡調査報告　－朝日町編5－　境A遺跡　石器編』
富山県教育委員会　1991　『北陸自動車道遺跡調査報告　－朝日町編6－　境A遺跡　土器編』
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986　『石川県能都町　真脇遺跡』
加藤三千雄　1997　「北陸における縄文時代前期末葉群の展開（1）」『石川考古学研究会々誌』
鈴木道之助　1994　『図録　石器入門事典　縄文』　柏書房
中野純　1998　「鍋屋町式土器と福浦上層式土器の再編素描」『新潟県考古学談話会会報』
樋口清之　1933　「玦状耳飾考」　『考古学雑誌』23－1・2
樋口清之　1939・40　「日本先史時代人の身體装飾」『人類学・先史学講座』13・14
藤田富士夫　1989　『玉』　考古学ライブラリー52　ニュー・サイエンス社
山本正敏　1991　「蛇紋岩磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学』第35号
古岡康暢　1989　『珠洲の名陶』　珠洲市立珠洲焼資料館
古岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館



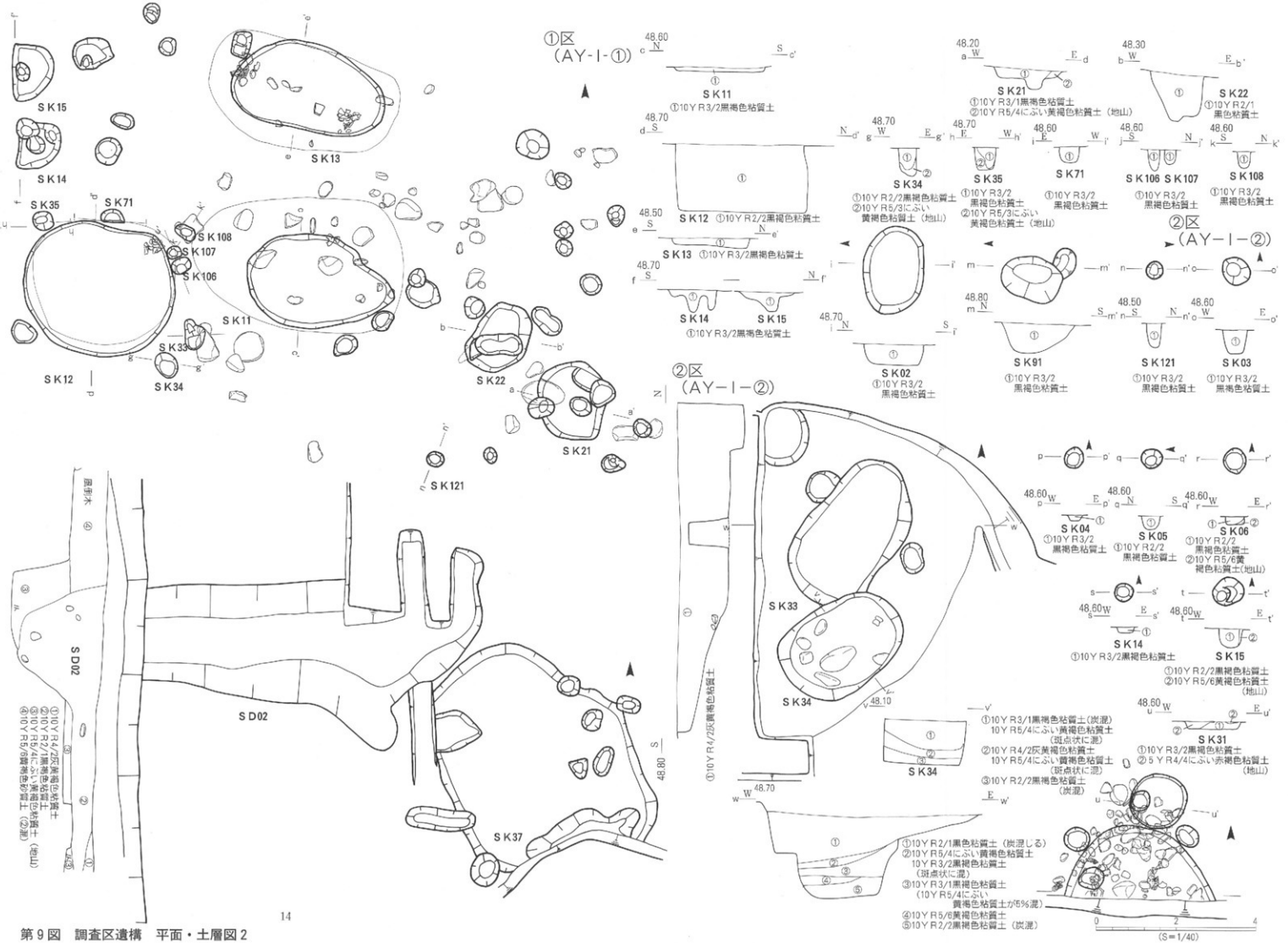
第6図　遺物分布図（グリット：2m×2m）

A
A'
①10YR5/2灰黄褐色砂質土
②10YR4/1褐灰色粘質土
③10YR3/1黒褐色粘質土
③'10YR3/3暗褐色粘質土
④10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
撹乱
B
B'
①10YR4/2灰黄褐色粘質土
②10YR4/2灰黄褐色粘質土
③10YR4/2灰黄褐色
(遺)10YR4/4褐色粘質土
④10YR4/4褐色粘質土(地山)
⑤5YR3/2暗赤褐色粘質土
C
C'
①10YR4/2灰黄褐色粘質土
②10YR2/1黒色粘質土
③10YR4/2灰黄褐色粘質土
(遺)10YR4/4褐色粘質土
④10YR4/4褐色粘質土(地山)
⑤5YR3/2暗褐色粘質土
D
D'
①10YR4/2灰黄褐色粘質土
②10YR2/1黒色粘質土
0
10
20

第7図　調査区全体図

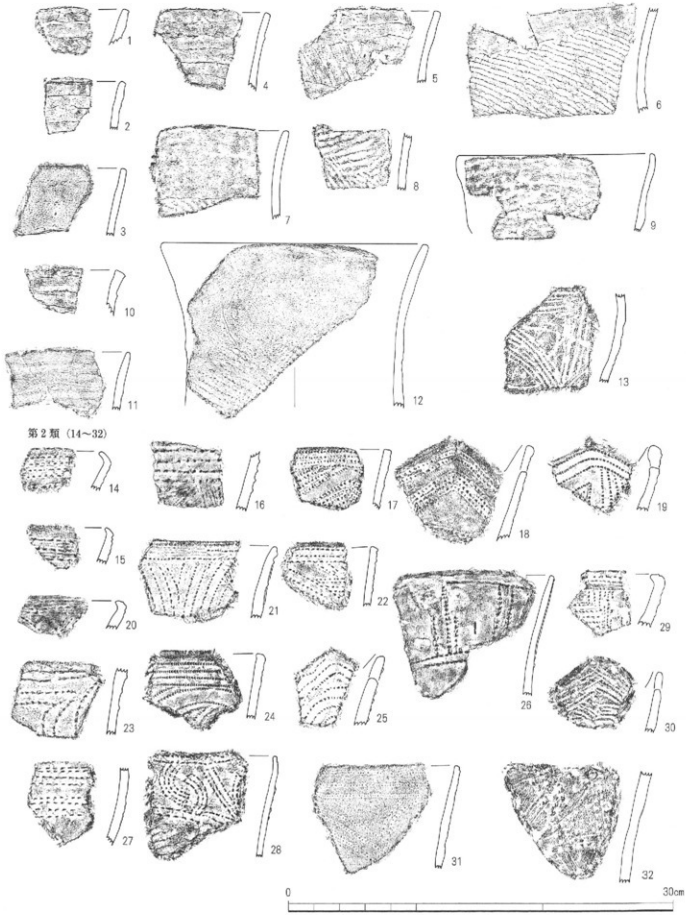


第８図　調査区遺構　平面・土層図１

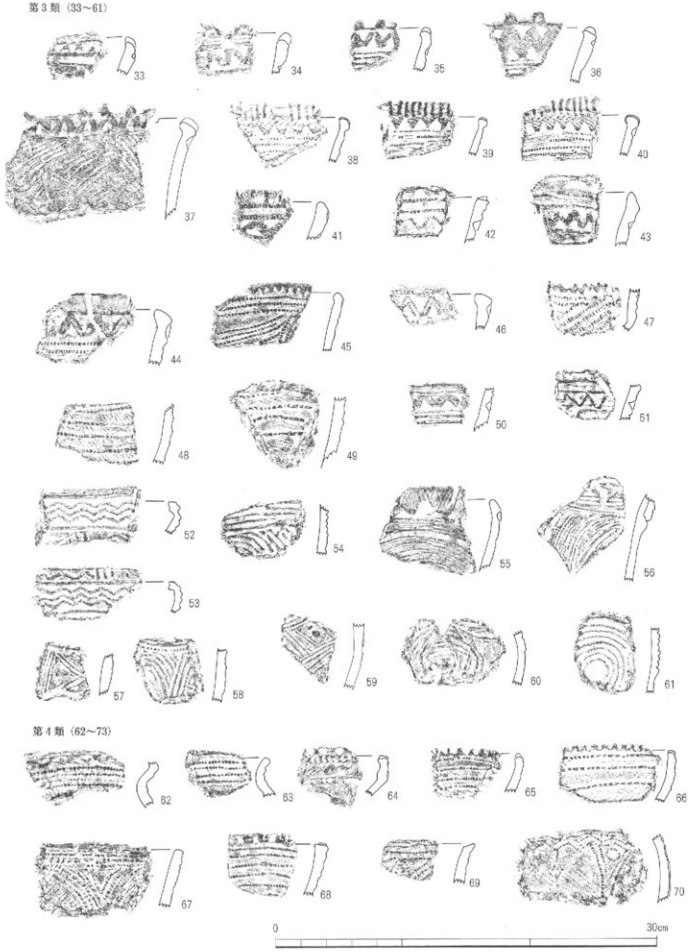


14

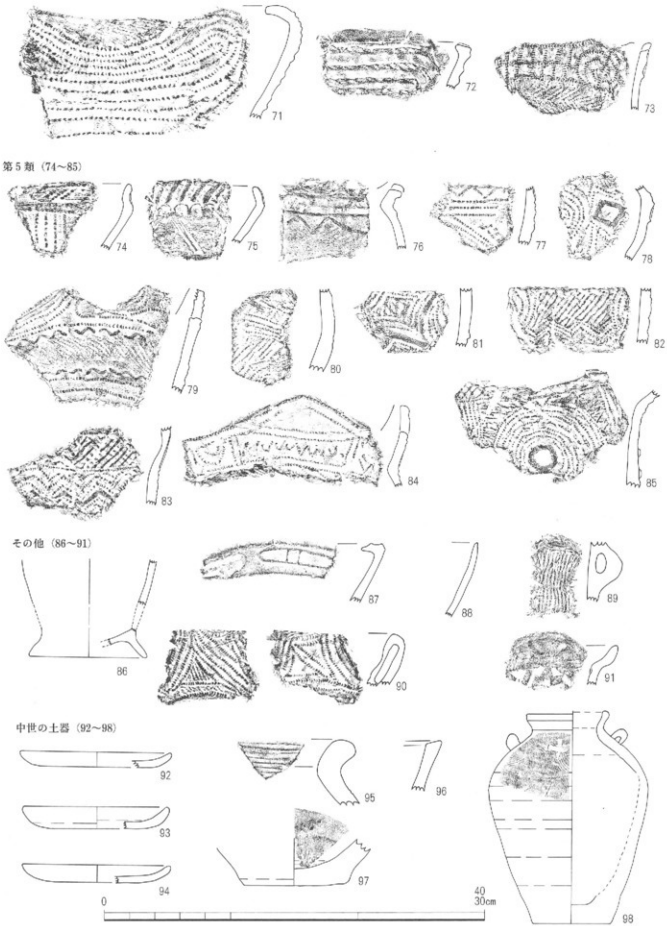
第9図　調査区遺構　平面・土層図2



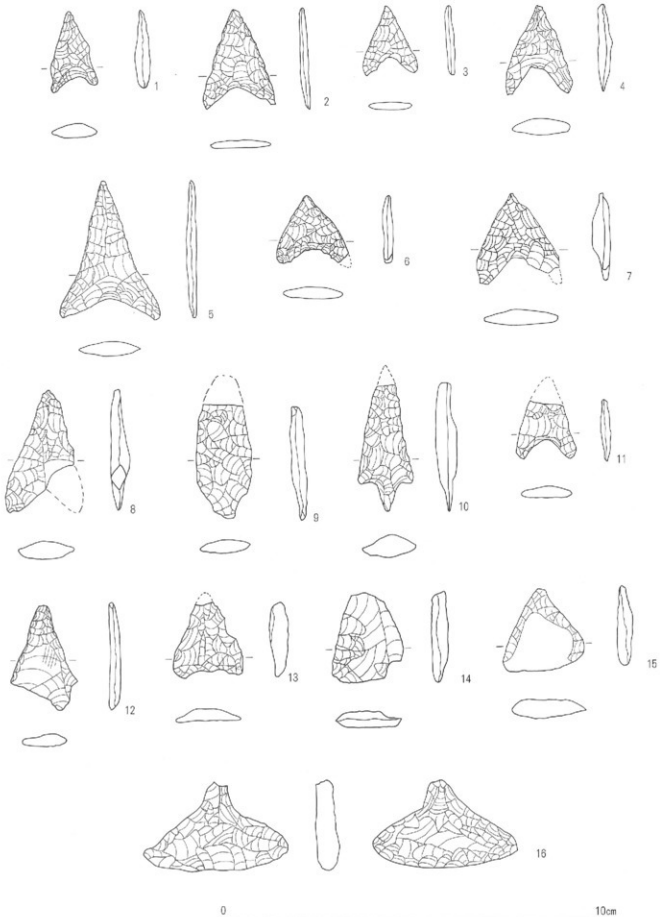
第10図　縄文土器　第1類・第2類（S＝1／3）



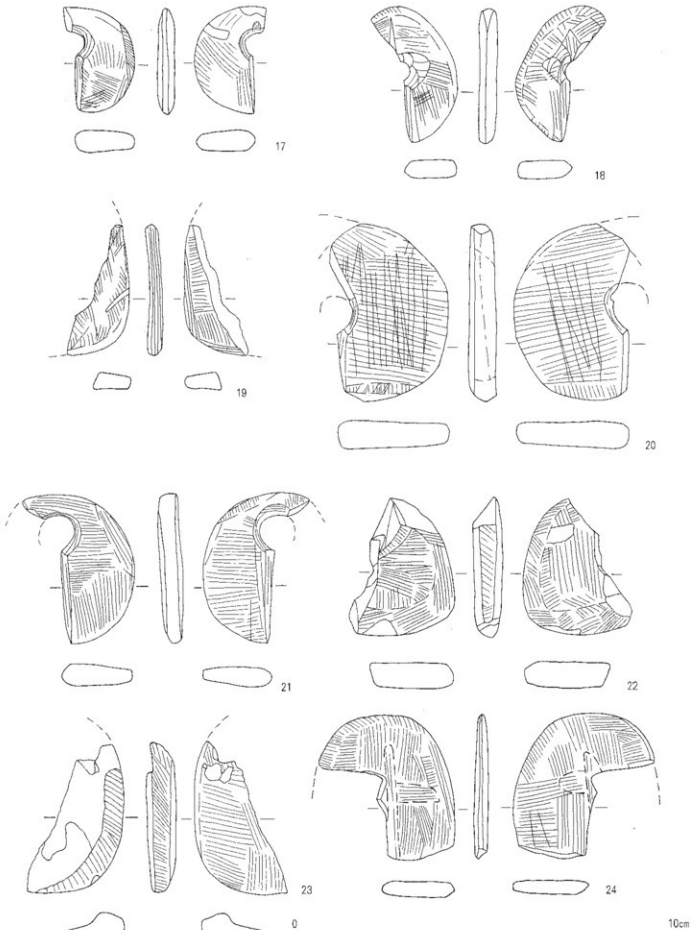
第11図　縄文土器　第３類・第４類（S＝1／3）



第12図　縄文土器　第5類・その他、中世の土器（98 S＝1／4、その他 S＝1／3）

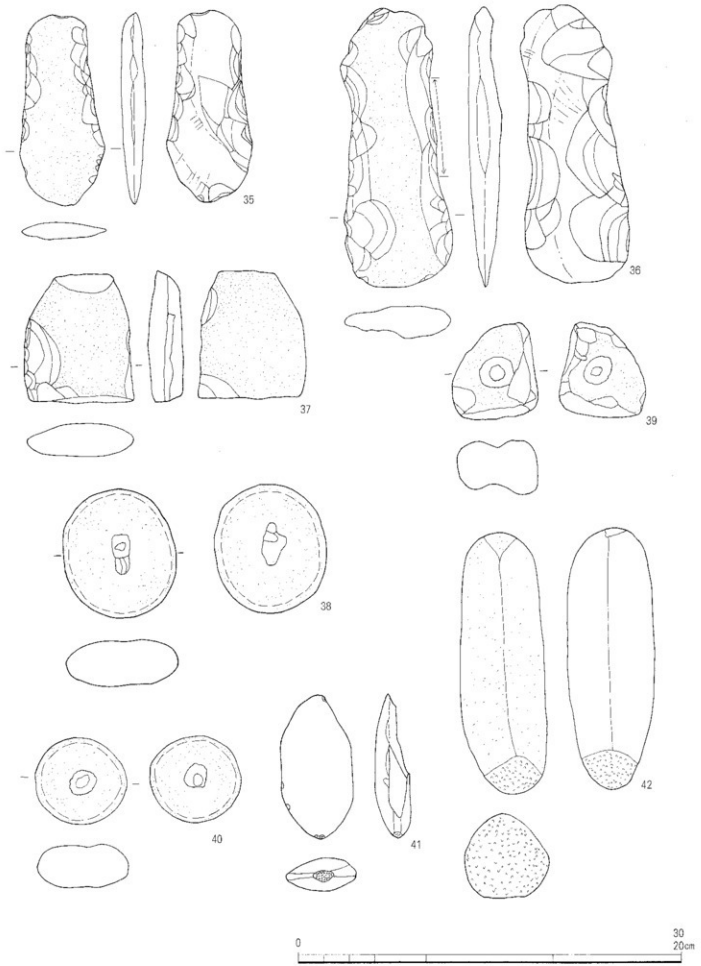


第13図　石鏃・石匙（S＝1／1）



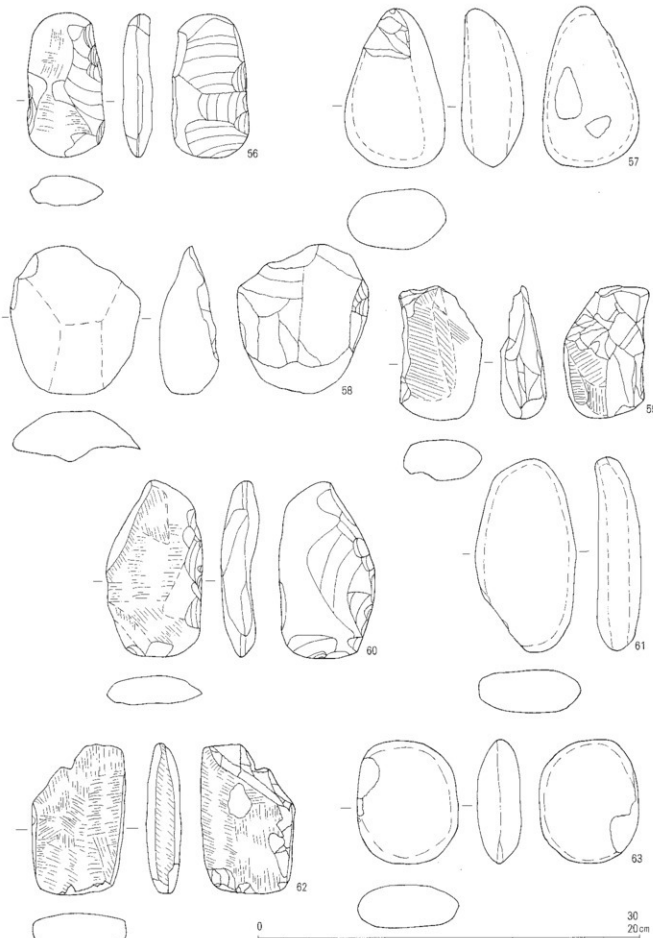
第14図　玦状耳飾（S＝1／1）

第15図　玦状耳飾・垂玉・玉未成品・ヒスイ原石・蛇紋岩加工品(25～29　S＝1／1、30～34　S＝1／2)

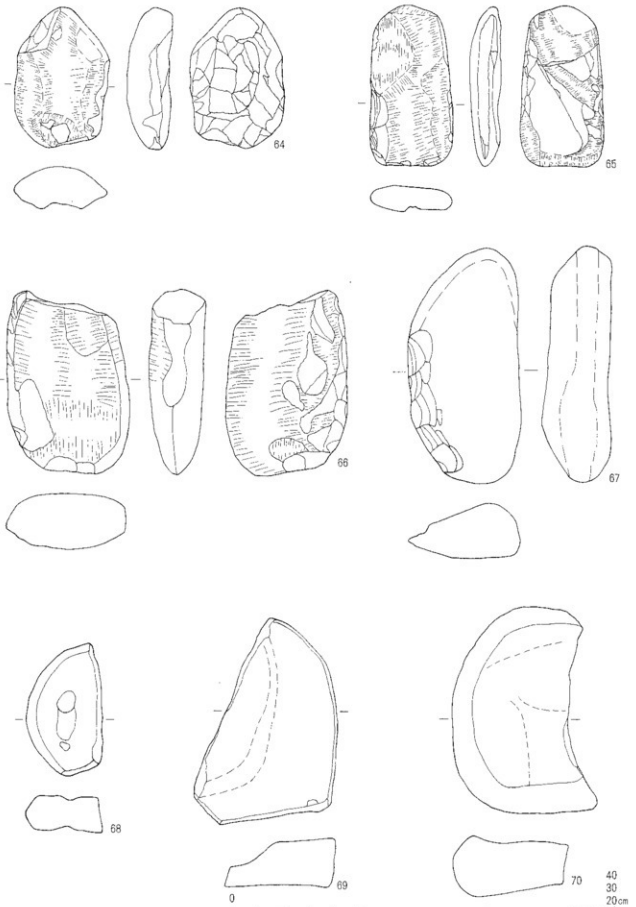


第16図　打製石斧・凹石・叩石（35～40　S＝1／3、41・42　S＝1／2）

第17図　磨製石斧（43・44・54　S＝1／3、その他　S＝1／2）



第18図　磨製石斧（57・61　S＝1／3、その他　S＝1／2）



第19図　磨製石斧・石皿・砥石（64・65　S＝1／3、66・67　S＝1／2、68～70　S＝1／4）

調査区全景

調査区全景

表土除去

調査区全景

Ⅰ区全景

Ⅱ区全景

調査終了後深掘作業

作業風景

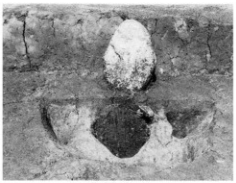
作業風景

作業風景

Ⅰ・Ⅱ区遺構写真

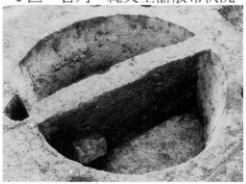
Ⅰ区

Ⅰ区　石列・縄文土器散布状況

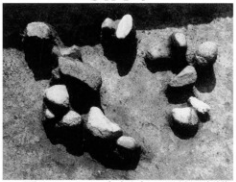


ＳＫ１４

Ⅰ区　ＳＤ０１

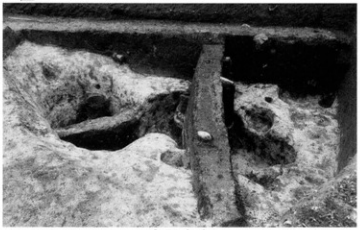


Ⅰ区　ＳＫ１２



Ⅰ区ＳＤ０１南側内　石組遺構

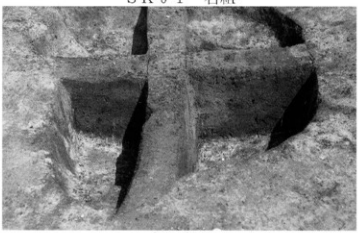
Ⅱ区



ＳＫ３３

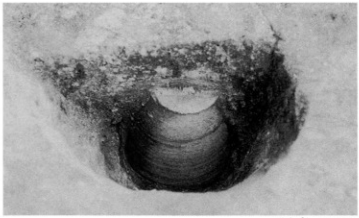
ＳＫ０１　石組

ＳＫ３４



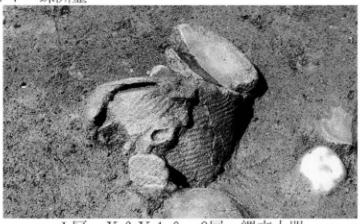
ＳＫ２７

Ⅰ・Ⅱ区遺物出土状況



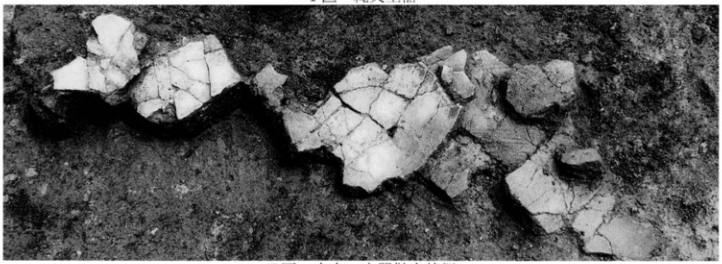
Ⅰ区　ＳＫ５７　珠洲壺

Ⅰ区　Ｘ７Ｙ５　縄文土器



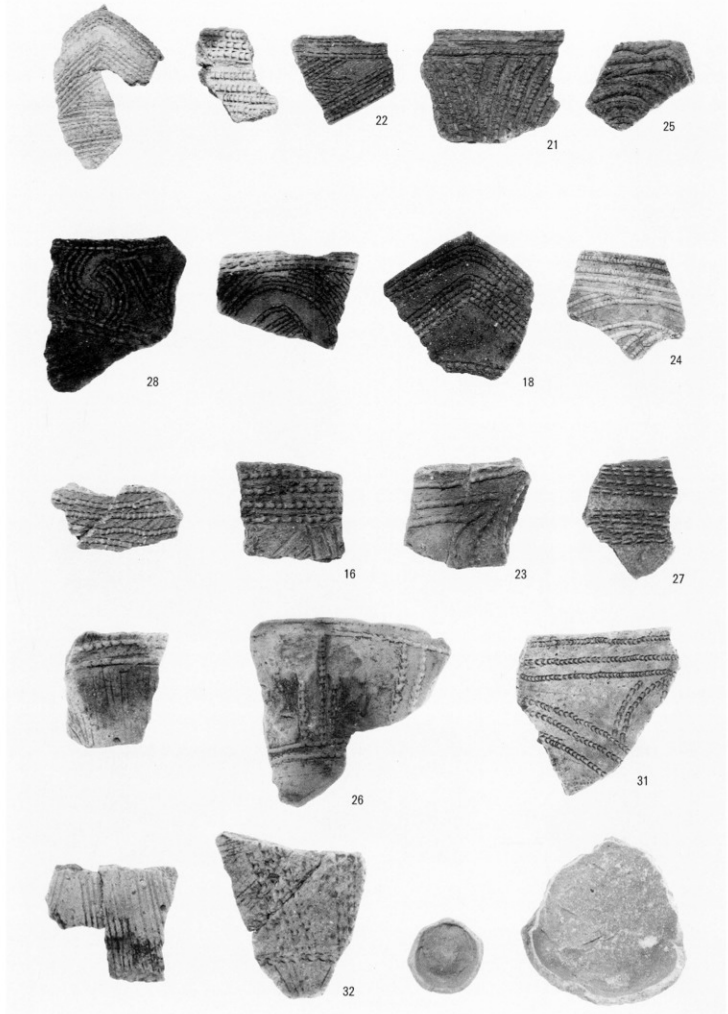
Ⅰ区　Ｘ６Ｙ１０　3層　縄文土器

Ⅰ区　縄文土器

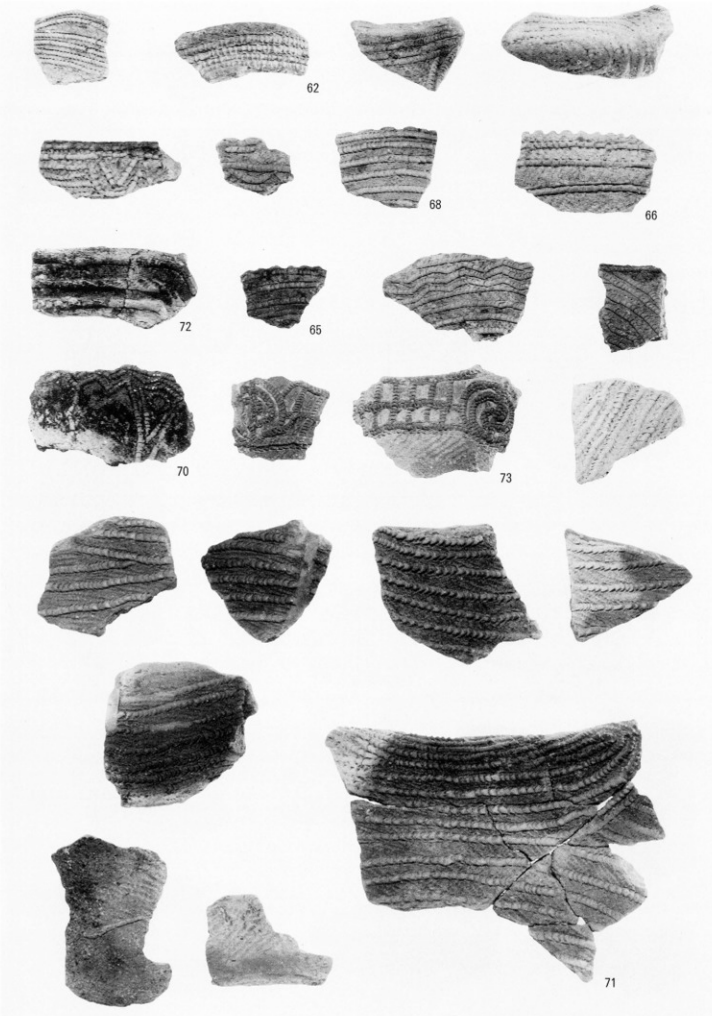


Ⅱ区　中央　土器散布状況

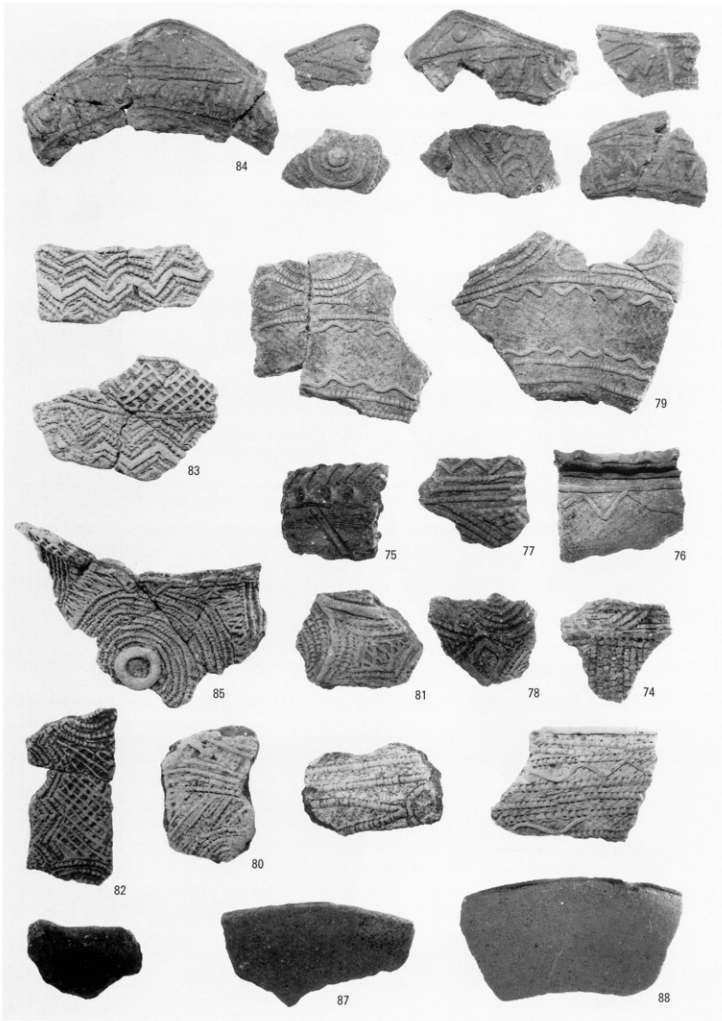
縄文土器（S=1/2）



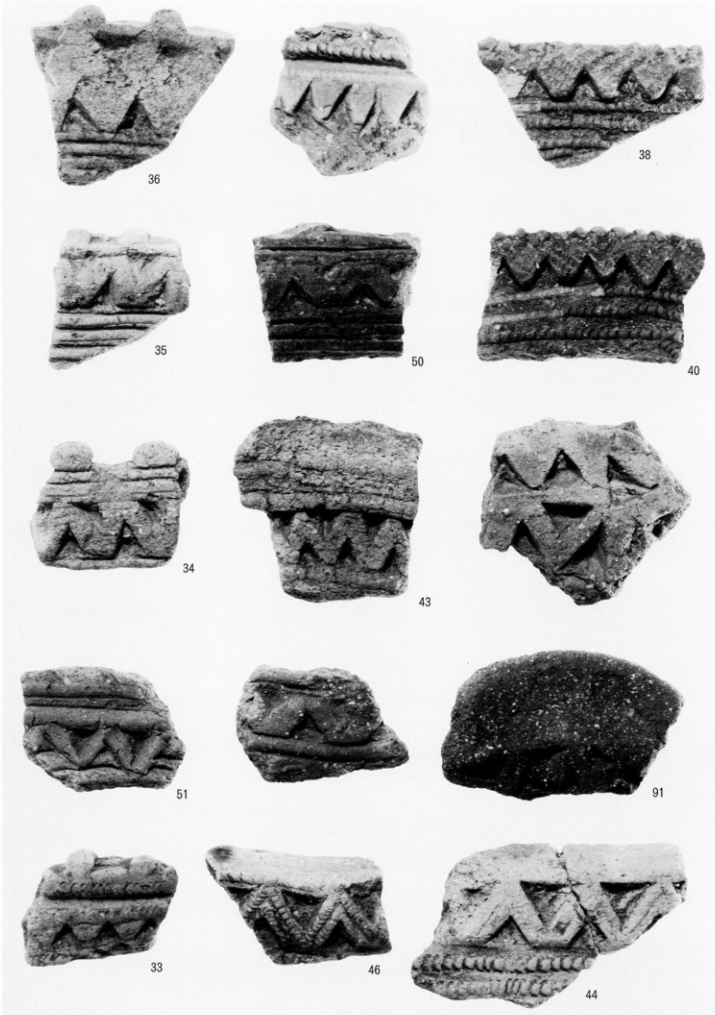
縄文土器（S=1/2）



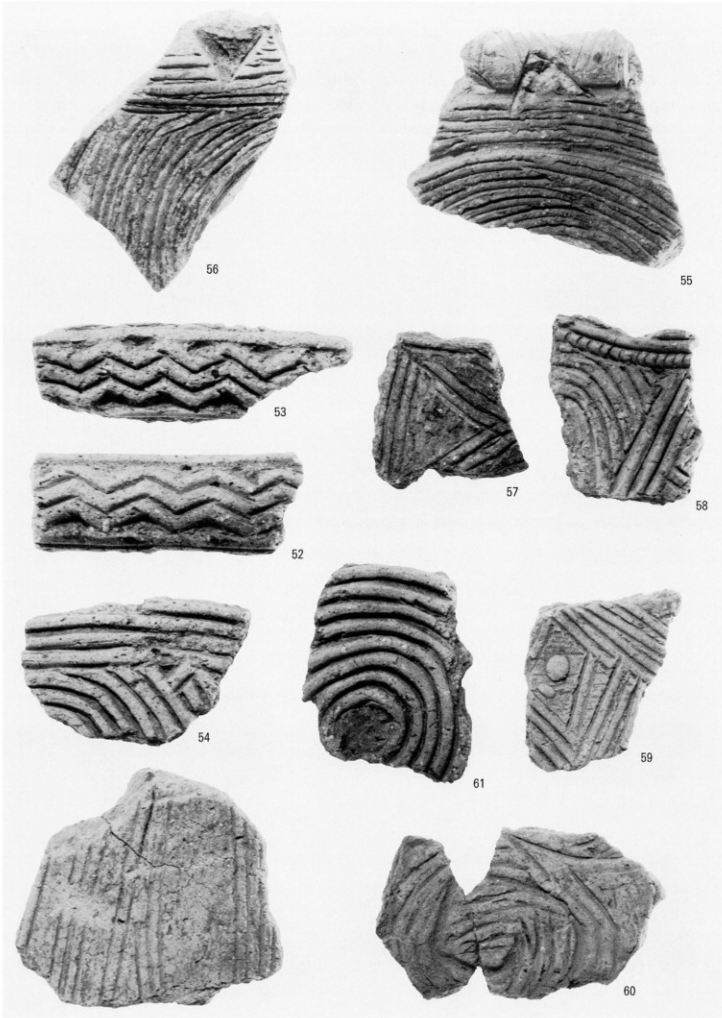
縄文土器（S=1/2）



縄文土器（S=1/2）

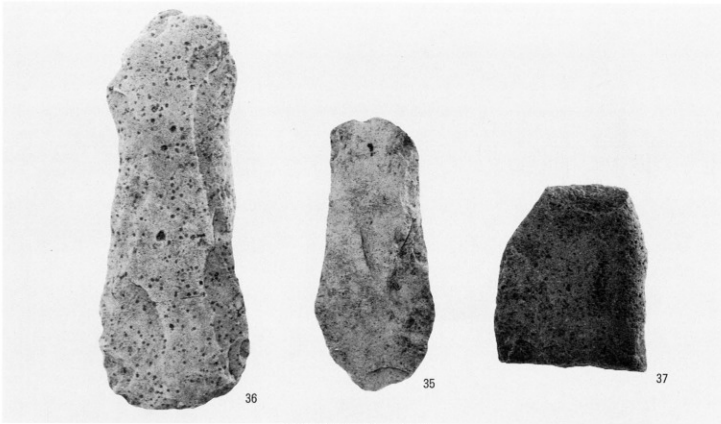


縄文土器（S=1/1）



縄文土器（S=1/1）

縄文土器（S=1/1）



打製石斧（S＝1/2）

磨製石斧・玉斧（S＝1/1）

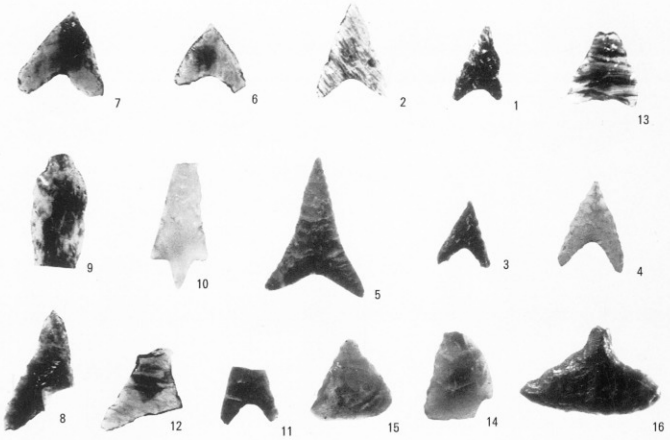
磨製石斧（S=1/2）

ＳＫ１２１内出土（S=1/2）

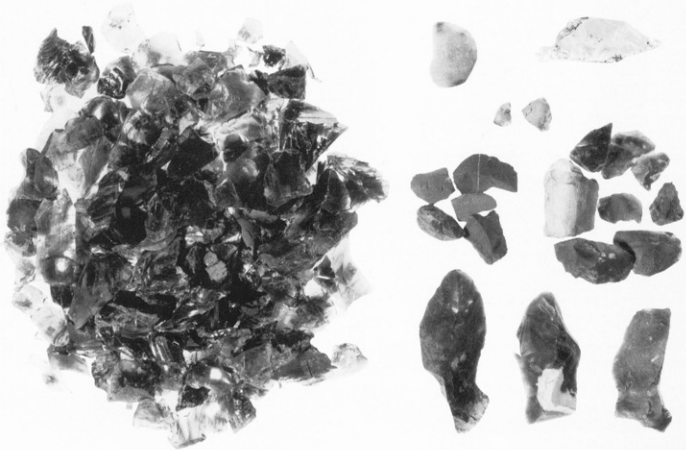
転用（ハンマー）（S=1/2）

蛇紋岩・翡翠他原石・加工品（S=1/2）

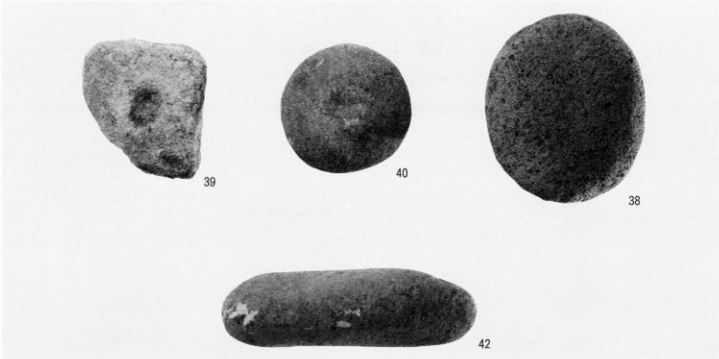
玦状耳飾　垂玉　蛇紋岩加工品（S=1/1）



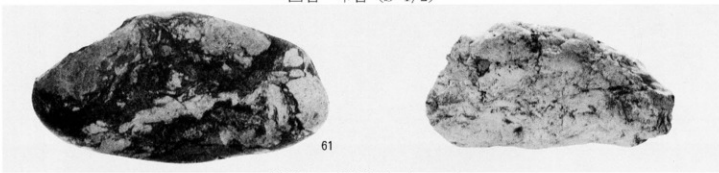
石鏃・未製品（S=1/1）



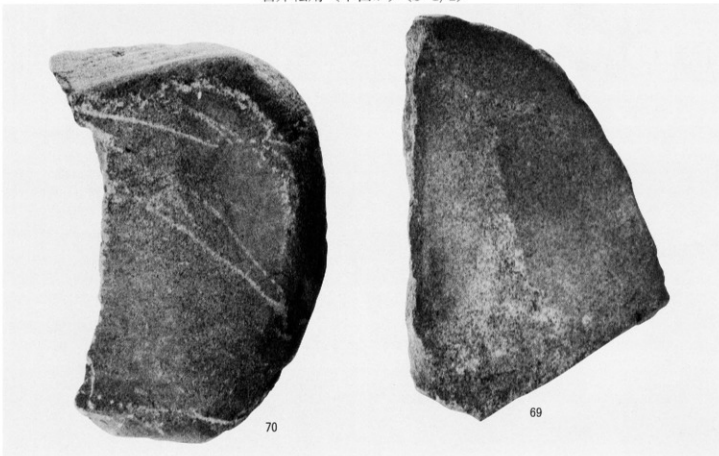
黒曜石・水晶・玉髄・翡翠原石



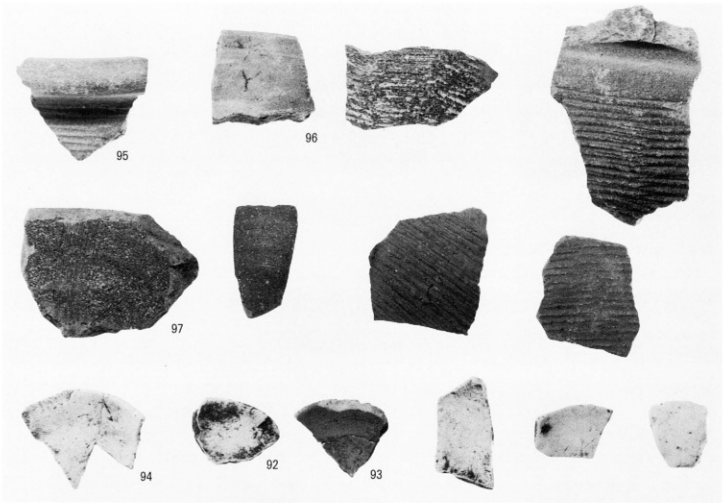
凹石・叩石（S=1/2）



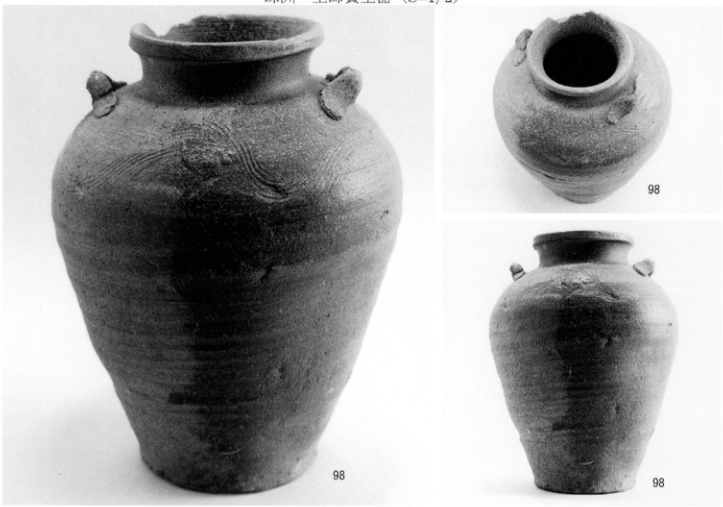
石斧転用（中世か）（S=1/2）



砥石・石皿（S=1/2）



珠洲・土師質土器（S=1/2）



珠洲　双耳壺

報告書抄録

ふりがな	へいせい14ねんど　とやまけんあさひまちやなぎだいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	平成１４年度　富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書
編著者名	（財）朝日町文化・体育振興公社　匂坂友秋 （財）朝日町文化・体育振興公社　越間瑞穂
編集機関	朝日町教育委員会
所在地	〒939-0793 富山県下新川郡朝日町道下1133　ＴＥＬ（0765)83-1100
発行年月日	西暦２００３年２月２８日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
やなぎだいせき 柳田遺跡	富山県 しもにいかわぐん 下新川郡 あさひまち 朝日町 おおやけ 大家庄 836番地他	16343	343063	36° 55' 26"	137° 33' 39"	020502 ～ 020628	433	主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業に係る事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳田遺跡	散布地	縄文・中世	溝・穴	縄文土器・打製石斧 磨製石斧・玦状耳飾・石錘 土師質土器・珠洲・瀬戸原石	

平成15年２月発行

富山県朝日町
柳田遺跡
発掘調査報告書

編集　朝日町教育委員会
発行　朝日町教育委員会
富山県下新川郡朝日町道下1133
印刷　有限会社　両越印刷